

2025.10.19.

## 「聖書が証しする方」

旧約 申命記 30章 15～20節

新約 ヨハネによる福音書 5章31～40節

### 1. はじめに

聖書を読んでいきますと、何を言っているか分からない、そういう箇所に出会うことがあります。そのような場合、どうすれば良いのか？いくつか対応の仕方があります。一つはその聖書の箇所について注解書や聖書の辞書で調べる。また、同じ言葉、或いは同じようなことが記されている他の聖書箇所を読む。あるいは、最近はとても便利になりましてインターネットで聖書箇所を検索しますと、その箇所についての説教が幾つもヒットします。それを読む。そのようにして、何とか理解していくというあり方があります。一番手っ取り早いのは、牧師に聞くということかもしれません。それも良いでしょう。けれども、もう一つ有力なあり方は「放っておく」、或いは分からないところは飛ばして先を読んでいくというあり方です。「それでいいのか？」と言われそうですが、分からないところは無理に分かろうとしないでも、いずれ分かる 때가来ますから、それまで心に留めておく。そうすると、聖書の別の箇所が分かったときに、芋ずる式に分かるということもよくあることです。大切なことは、分からないところに出会っても、そういう所は飛ばしても良いですから、とにかく聖書を読む、読み続けるということです。

この「聖書の箇所が分からない」というのには、いろんなレベルがあります。言葉が分からないという所から始まって、ここで言おうとしていることが分からない、前後の関係が分からない、聖書全体のメッセージとどう関係しているのか分からない等、実に様々です。また、「聖書が分かる」というのにも、色んなレベルがあります。意味は分かるというレベルから、自分のこととして分かる、腑に落ちる、納得するというわかり方まで色々です。今朝は、聖書の読み方を私共に示してくれる典型的な所ですので、そこからまず見てみましょう。

### 2. 証し

今朝与えられております御言葉において、繰り返し繰り返し使われている言葉があります。それは「証し」という言葉です。「証し」、或いは「証しをする」という言葉が、11回も使われています。このことに気がつきますと、ここは「証し」について語っている、語ろうとしているということの察しが付きます。これに気がつくのには、頭は要りません。鉛筆で線を引いていくだけで分かります。では、「証し」「証しする」とはどういうことでしょうか？これは別の言葉で言い換えれば「証言」「証言する」、或いは「証明する」「証拠を挙げる」ということななるでしょう。法廷において、有罪・無罪の決め手となるのは証言であり、証拠です。それをここで挙げるというのです。ちなみに、聖書においては「**いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない。**」(申

命記 19 : 15) とされております。

では、ここでイエス様は何を証ししようとしているのでしょうか。前回、5章の19節以下のところで、イエス様はご自分と父なる神様との関係、ご自分が神の子であるということをお語りになりました。イエス様は父なる神様と御心と御業と愛において一つである。また、イエス様は復活され、そしてやがて裁き主として立たれる。そして、父なる神様とイエス様は全ての者に敬われる。そうイエス様はお語りになりました。イエス様はご自分でそのようにご自身のことをお語りになったのですけれど、今朝の所では、それは私が勝手に言っていることではなくて、様々なことがそれを証ししている。例えばこうだ。というように、具体的にイエス様が神の子であると証ししていることを上げてお語りになっているわけです。

31節を見ますと「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。」と語り始めます。この言葉は、とっても面白いです。30節までイエス様は、ご自分で私は神様と一つである、神の御子であるとお語りになられたわけですが、自分で言っているだけでは、それは真実ではないと言うのです。これは、当時の裁判における証言に対して、一般的に理解されていたことでした。自分のことを自分で証言しても、それは自分に不利になることは言わないわけですから、当たり前のことです。確かに、「私は神の子である」と言っても、言うだけならば誰でも言えます。それが真実であるという保証はありません。日本にある色々な宗教の教祖もそうでしょうし、「自分が再臨のメシア、キリストである」と言っている人はいつの時代にもおりましたし、今もいます。多分、現在世界中で少なく見積もっても何百という人がそんなことを言っています。みんな偽物であり、嘘つきです。イエス様はここでご自身が神の御子であることを証するものがあると告げます。それは、究極的には父なる神様ご自身です。神様ご自身が、イエス様が神の御子であることを証しされるのですが、それは具体的には三つのあり方で神様は証されると告げられます。それは第一に洗礼者ヨハネによって、第二にイエス様の御業によって、そして第三に聖書によってです。イエス様は神様ご自身がわたしを神の御子であることを証していると告げるのです。順に見てまいります。

### 3. キリストを証しする① 洗礼者ヨハネ

第一に洗礼者ヨハネですが、彼は1:27で「その人はわたしより後から来られる、わたしその履き物のひもを解く資格もない。」と告げ、メシア、キリストの到来を預言しておりました。そして彼は1:29においてイエス様を見て「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。」と告げ、また30節では『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしに勝る。わたしより先におられたからである。』とわたしが言ったのは、この方のことである。」と告げ、32節では「わたしは、霊が鳩のように天から下ってきて、この方の上にとどまるのを見た。」と告げました。これは、イエス様がメシア、キリストであることを証言したわけです。勿論、このように洗礼者ヨハネにイエス様がメシア、キリストであることを知らせたのは神様ご自身でした。洗礼者ヨハネは預言者でしたから、神様は彼にイエス様が誰であるのかをお知らせになりました。

洗礼者ヨハネによる証し、証言というものは、当時とても説得力のあるもの、真実な言葉と受け取られました。なぜなら、洗礼者ヨハネが起こしたユダヤ人たちが悔い改めることを求める運動は、全ユダヤを巻き込んだ大きな宗教的なうねりとなっており、洗礼者ヨハネがまことの預言者であるということを疑う人などほとんどいなかったからです。人々からそれほどの支持されていたのが洗礼者ヨハネでした。そのヨハネがイエス様に「聖霊が下った」、イエス様こそ「神の子羊だ」と証言したわけです。イエス様はこれを否定していません。5：33「**5:33 あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。**」と告げています。この「真理」というのはイエス様ご自身のことであり、イエス様が神の御子であるということです。洗礼者ヨハネから、あなたたちは聞いたでしょうと言うわけです。また、35節で「**ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。**」と告げます。これはヨハネの証言というものが、既に過去のものになっている、つまり洗礼者ヨハネは既にヘロデによって殺された後であったことを示しているのでしょう。洗礼者ヨハネは神様によって真理を告げる「燃えて輝くともしび」でした。そして、人々は洗礼者ヨハネによって、一時は神様の御前に悔い改めへと導かれたのです。しかし、それはイエス様へと繋がりませんでした。洗礼者ヨハネは確かに一時であったにせよ、イエス様を指し示しました。

ところが、イエス様は34節で「**わたしは、人間による証しは受けない。**」と言うのです。イエス様は洗礼者ヨハネの言葉を否定しませんが、洗礼者ヨハネが言ったからわたしが神の御子なのではない。洗礼者ヨハネが預言者であったとしても、わたしと父なる神様の交わりについてどれほどのことが分かるというのか。そんな感じでしょうか。だったら、誰がイエス様を証しをされるというのでしょうか。

#### 4. キリストを証しする② 主イエス・キリストの業

それは主イエス・キリストご自身が為される業、もっとはっきり言えば「しるし」としての奇跡です。ここまで、イエス様はカナの婚礼で水を葡萄酒に変える奇跡、役人の息子の病をただ言葉だけで癒やす奇跡、ベトサダの池の畔で38年間動けなかった人を癒やされた奇跡を行ってきました。それらの奇跡は父なる神様がイエス様と共に働いてくださり、為されたことでした。どれも、人間業ではありません。天地を造られた全能の父なる神様が働いてくださって、はじめて為される出来事でした。つまり、これらの奇跡が私が父なる神様と一つであること、私が神様の御子であることを示している。そして、この奇跡をもって私が神の子であることを証してくださっているのは、父なる神様ご自身であるとイエス様は告げています。36節「**しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。**」神様がわたしをお遣わしになったのでなければ、どうしてこんなことが出来ようか。そう言われるわけです。「論より証拠」と言うわけです。ヨハネによる福音書においては、イエス様が為された奇跡が「しるし」と呼ばれているのはそのためです。イエス様の為された奇跡は、イエス様が神の御子である「しるし」であ

り、この「しるし」によって神様ご自身がイエス様が神の御子であることを証してくださっている。そう、イエス様は告げているわけです。

そうすると、この奇跡によってイエス様が神の御子であるということが証しされるとするならば、奇跡をする者は神の御子であるということになるわけですが、本当にそのように言って良いのでしょうか。わたしは事はそれほど単純ではないと考えています。勿論、聖書に記されていますように、神様が奇跡というあり方で救いの御業を今も為してくださることを、私は単純に信じております。しかし、奇跡をする人がみんな神様から遣わされた人と言えるかどうか、それについては何とも言えないところがあると思っています。それは、私共はとても簡単に、つまり間違っ、早とちりして「これは奇跡だ」と受け止めてしまうところがあるからです。イエス様が為された奇跡は、まさに「しるし」でしたけれど、様々な宗教において「祈祷したら病気が直った、奇跡だ」と言っているわけです。祈って、それが叶えられれば「これは奇跡だ」と簡単に信じてしまう私共です。それでも良いのかもしれませんが、カルト宗教の多くはこの奇跡を売りにしているわけです。オウム真理教の教祖は、空中浮遊と言ってあぐらを組んだままで1メートル以上飛び上がることが出来るとかで、多くの人が自分も修行すればできるようになるとだまされました。また、別の宗教ではお祈りすればどんな病気も治ると言われ、薬を飲めば、薬で治ったのか祈って治ったのか分からないから、薬を止めるようにと言われた人もいます。とんでもない話です。私はこう考えます。空中に浮遊することができることと、私の救いと何の関係があるのか？薬で治ろうとお祈りで直ろうと、癒やされることが大事なのであって、どちらで直ったかが分かる必要があるのか？更に言えば、サタンはその人の魂を自分のものにするためならば、どんなことだってします。病気を治すくらいは容易いことでしょうし、驚くほどの富を与えることだってするでしょう。私共は神様の業と悪霊の業を、きちんと見分けなければなりません。これは中々難しいことですが、これを見誤りますと大変なことになります。神様の業と悪霊の業を見分ける時の決定的なポイントは、それによって誉め称えられるのが神様であるか、イエス様であるか、それとも人間や人間の組織であるかです。

そこで、最後に決定的に重要な証しとして「聖書」が挙げられます。

### 5. キリストを証しする③ 聖書

「しるし」としての奇跡は「見る」のですけれど、もう一つ「聞く」ということが重要になります。預言者たちは神様からの言葉を聞き、預言者として立てられました。しかし、全ての人が直接的に神様の言葉を聞くわけではありません。しかし、神様はその御心を現す言葉を私共に与えてくださいました。それが神の言葉である「聖書」です。

この時イエス様を殺そうと狙うようになって人たちはユダヤ人です。彼らは旧約聖書に記されている律法に従うことによって、救いに至ると考えていました。ですから、旧約聖書を大変良く学んでいました。ラビと呼ばれる律法学者になる為には、幼いときから聖書を全て暗唱し、それから膨大な聖書についての解釈を覚え、それを判例のようにして現実に適応出来るようにならなければなりません。それはとても大変なことでした。それほどまでに彼らは聖書に精通していたにもか

かわらず、彼らはイエス様がメシア、キリストであることを認めることが出来ませんでした。それは、彼らが「聖書読みの聖書知らず」だったからです。イエス様は39節で「**あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。**」と告げました。ここで「聖書」と言われているのは旧約聖書です。まだ「新約聖書」は形になっていません。そもそも、旧約聖書という言い方は、新約聖書が出来たのでこう呼ばれるようになったわけです。イエス様の時代には、現在の旧約聖書しかありません。律法学者たちは聖書を研究して、救いに至る道、永遠の命に至る道を探し、それをもって人々を指導し、導いていました。それが律法を守るという道でした。しかし、イエス様は「**聖書はわたしを証しするためにある**」と告げられました。これは決定的なことです。律法学者たちは聖書については、全て暗唱できるほどに良く知っていました。しかし、それが何を指し示しているのかを知りませんでした。ですから、文字通りに「ここにはこう書いてある。だから、こうしなければならない。」そのように読んでいたわけです。しかし、聖書は神様の御心を示していましたけれど、その御心は主イエス・キリストによって完全に現れるものであり、その意味では聖書は主イエス・キリストを指し示している、主イエス・キリストを預言している。そのように読まなければ、神様が聖書を通してお語りになっていることを、正しく受け止めることは出来ないということです。

## 6. キリスト預言として旧約聖書を読む

このことは具体的に見てみれば、すぐに分かります。時間がないので、大変有名なキリスト預言の所を二カ所だけ挙げます。例えば詩編の22編。「**わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか**」で始まる詩編です。この言葉はイエス様が十字架の上で最後に大声で叫ばれた言葉です（マタイ27:46）。私共はこの詩編が、イエス様の十字架を預言したものであると分かります。8.9節「**22:8 わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い／唇を突き出し、頭を振る。 22:9 『主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら／助けてくださるだろう。』**」これはイエス様が十字架に架けられたときに、人々に罵られた場面そのものです。或いは18.19節「**22:18 骨が数えられる程になったわたしのからだを／彼らはさらしものにして眺め／ 22:19 わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く。**」これもイエス様が十字架に架けられた時に十字架の下では、イエス様の服をくじ引きして兵士たちが分け合ったことを明らかに預言しています。

また、イザヤ書53章を見れば、2～5節「**53:2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。 53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。 53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。 53:5 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」とあります。これは明らか**



に十字架に架けられたイエス様の姿を描いています。そしてイエス様の十字架というものが何なのか、またどういう意味を持つものだったのかを預言しています。イエス様の救いに与った私共から見れば、それは明らかなです。しかし、イエス様の十字架抜きにこれを理解しようとしますと、何を語ろうとしているのかさっぱり分かりません。「この人」とは誰のことなのかも分かりません。

このような所を挙げていくならばきりがありません。しかし、このように申しますと、キリスト者にとっては、そのように読むのが自然であり当たり前だけれど、ユダヤ教の人にはそうは読めないのは当然ではないかとお考えになる人もいるでしょう。そうなのです。つまり、イエス様を信じなければ、聖書は分からないということです。

## 7. 聖霊によって

実に聖書が分かるということは、イエス様が分かるということです。イエス様が誰であり、イエス様は何を為されたのか、それが分かるということです。しかし、イエス様が分からなければ聖書は分かりません。聖書が分かれば、いよいよイエス様が、神様が分かります。そして、イエス様が分かれば、いよいよ聖書が分かってきます。しかし、これでは「鶏が先か、卵が先か」という話になってしまいます。ここには大切なことが一つ抜けています。それは、聖霊です。聖書は聖霊の導きによって記されました。ですから、聖書は聖霊の導きによって読まれなければ、決して分かりません。それは、信仰をもって読まなければ分からないと言っても同じです。それが他の書物と全く違うところです。そして、その信仰を与えてくださるのも、聖霊なる神様です。聖霊なる神様は、父なる神様の霊であり、子なるキリストの霊です。この聖霊の導き、聖霊の御支配の中で私共は今朝も主の日の礼拝を捧げています。この礼拝において、私共は聖書が分かり、イエス様が分かる。それは聖霊なる神様の導きの中で、神の言葉を聞くからです。だから、共に神様に向かって「父よ」と呼び、神様を賛美するという出来事が起きているわけです。先ほどお読みしました申命記 30 章 20 節には「**あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命で**」あると告げられてておりますが、これは実にイエス様を愛し、イエス様のみ声を聞き、イエス様につき従う。そこに私共の命があるということです。まことにありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、聖霊なる神様お働きの中で、聖書の言葉を、私共に語りかけてくださるあなた様の御言葉として聞かせてくださいました。そして、イエス様こそがただ独りの御子であり、私共の主であられることを改めて心に刻ませてくださいました。感謝いたします。どうか、あなた様を、そしてイエス様を、心から愛し、これに聞き、これに従っていくことが出来ますように。聖霊なる神様の御手の中で、御言葉と出来事をもって私共を導き続けてください。私共の御国に向かつての足取りを確かなものとさせてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン